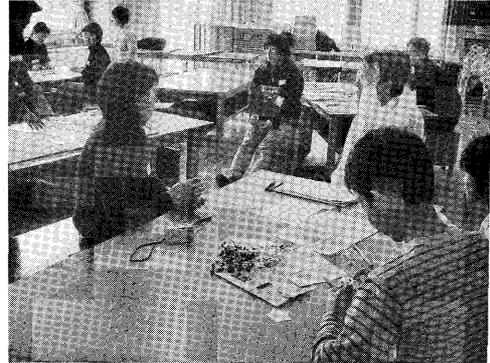


子どもの権利条約入門ワークショップ

子どもの権利条約ネットワーク

■目的

- ・対象：子ども・おとな
- ・効能：「ケンリってなに？」という人
⇒子どもの権利条約についてわかりやすく学ぶことができます。
- 「条約なら知ってるよ」という人
⇒じゃあ、実際にどうやれば条約を「使える」のかを一緒に考えることができます。知らない人のお手伝いもできます。
- 「よくわかんないけどとりあえず」という人
⇒とにかく楽しめます。いろんな人と面白いことができます。



■プロセス

- 前半：子どもの権利条約クイズ
- 後半：条約を活かす話し合い&条約ツリーづくり（写真参照）

■参加者の反応

- ・条約の基本的なことを理解することができた。（おとな）
- ・知ってるつもりでも案外知らないことがあった。（おとな）
- 帰ったら、自分の身近な子どもとのかかわりかたを考えてみたい。（おとな）
- ・子どもの考えを伝えることの大切さ。これからも自分から声をあげていきたい。（子ども）
- ・いろんな人に会えて話せてよかった。（学生）

■企画者ふりかえり

子どもの参加者も多く、企画の進行を助けてもらいました。子どももおとなも、お互いを尊重しながら、発想の柔軟さを大切にしつつクイズや演劇、創作などを通して子どもの権利条約をココロと身体で感じ、頭で考えることができたと思います。



（参加者人数：40名）

例えば「必ず～しなければならない」と言われたり、「決めつけられたりする」のはひっかかるなあという意見も出た。8才から、40代まで幅広い年齢層でお互いの考えを尊重しようというあたたかい雰囲気の中ですすめられた。

■参加者の感想

- ・こんなゲームしたことないです。とっても楽しかったです。もう一回したいです。
- ・人と話をする事、多様な考え方があることを知り勉強になりました。
- ・皆さん裏にある背景や当事者の気持ちを考えようとされている気持ちを感じ、大切だと思った。



(参加者人数：午前午後合わせて45名)



子どもが作る“しゃべり場”

—「少年犯罪」「理想の学校」「子どもの居場所」をテーマに—

川西子どもの人権ネットワーク

■目的

おとなに言いたい事は何か？おとなのいいたいことは何か？についてしゃべり場で話し合う。

■流れ

・アイスブレイキング：じゃんけんゲームでグループ分け

・理想の学校

学校で楽しいこと楽しかったこと

学校で嫌なこと(校則・体罰・先生の事とか)

こんな学校だったらいいな

・グループ替え→じゃんけんゲーム

・子どもの居場所

放課後(土日も)の遊び場所について子どもは今の、大人は昔の話をお互いに話す

何をしていた楽しいか？

どういふところがほしいと思っているか？

居場所ってどんなところの事か？



・昼休憩

・少年犯罪→じゃんけんゲームでグループわけ

浜田さんに最初、関係したような話を少ししてもらおう
事件についてどう思うか、みんなで話す。

どうしたらなくなるか？

・全体交流

今までにしゃべり場で出た意見をネットの子ども達
が発表する

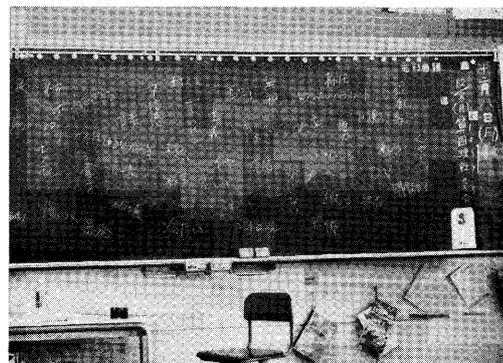
■参加者の反応

活発に発言してくれたし、自分たちも聞いてもらえた。

■企画者側のふりかえり

参加者が午前中は少なめだったけれど午後はびっくりするほどたくさんの方がきてくれてとてもうれしかった。何よりたくさんの方と話せてよかった。いろいろな考えを聞いたから勉強になった。

(参加者人数：午前 30 人 午後 36 人)



子どもの支援をする人☆語り合おう！

北摂子ども文化協会

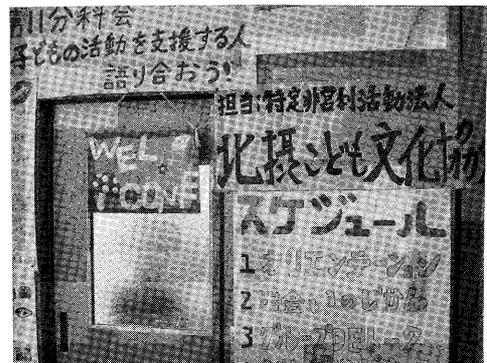
【午前の部】

■参加人数

参加人数： 19名
参加者： 12名
出身地： 大阪府・兵庫県・京都府・千葉県・茨城県・埼玉県
職業・所属： 高校生・大学生・看護師・ユースワーカー
NPO・親子劇場・YMCA等
スタッフ： 7名

■当分科会参加理由

- ・子どもを支援する職に就くことを考えている。
- ・色々な人とのつながりをつくるため。
- ・子どもの活動に関わっているため。
- ・子ども通信社 VOICE の子ども記者からスタッフになる予定なので、子どもたちのサポートについて話をしたいから。
- ・普段の活動に活かすため。
- ・子どもが参加してくれる環境や、どのような活動をすれば子どもが意見を言え楽しむことができるかを知りたいため。
- ・今一番気になることのため。
- ・分科会担当している当協会の青年を見てみたかったから。
- ・他の人がどのような活動をしているのか知りたかったから。
- ・このような仕事をしているから。
- ・市民参画、子どもの参画を考える活動をしていて、住民からいかにして市民となるか、普通の高校生がより生活しやすい仕組みとは何か？その大きな問題を考えるため。



■流れ

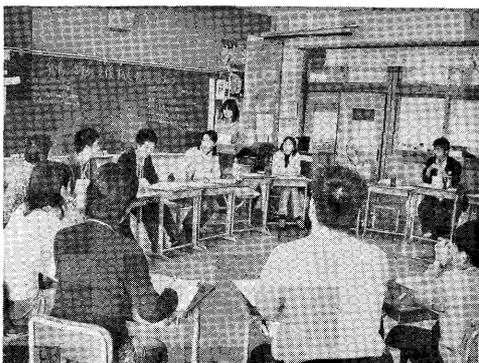
オリエンテーション→分科会担当であるNPO法人北摂子ども文化協会の概要説明。主な事業の中から「子どもの権利条約」の第31条の保障をミッションとした「ひと山まるごとプレイパーク」の活動内容の紹介。その後、気軽に話せるように全員で自己紹介（名前・出身・所属・分科会を選んだ理由・本日の意気込み等）。打ち解けたところで「語り合い」の開始。

まずは、参加者がどのような活動をしているのかを聞き合う。後半、「子どもの権利と義務」についての質問があげられた。子どもの権利について話しが始まる。

■「語り合い」で出た意見

- ・現在の「子どもの権利条約」は、子どもを保護する条約になっていないか？本来は、大人と子どもの壁を外すものではないの？子どもの自己実現の為の条約にしなければならない。子どもが好き勝手に行動する時、義務がでてくるのではないか。
- ・権利は誰にでも絶対存在する。たとえ非行をおこして施設に入った子どもでも、厳しい義務はついてくるが権利もある。義務は行動を起こす時に出てくる。権利の捉え方は個々のレベル。
- ・権利と義務を並べて考えるのは少し違うような気がする。
- ・「子どもの権利＝子どものわがまま」と捉えられがちである。子どもの権利とは【1】自分を大切にすること、【2】自分を大切にされること、【3】自分を認められることである。子どもは毎日のつながりを求めている。子どもの居場所がないのが現状。
- ・誰も信用しないと言う子がいる。親からの虐待を受けている。子どもが置かれている環境は、親との関係や周りの環境が大きく影響している。それを単に「わがまま」と捉えてしまうのはかわいそうである。1回や2回でも信頼できる大人に出会ったという経験がそのことにとって良い結果になればいい。

- ・最近子どもの病気が変わってきた。例えば拒食症や自殺願望等。これは、親子や友達等の人間関係



からの病である。親子関係でいうと、我が子だから分かってくれる・子どもなんだから我慢してほしいというような親の甘えが原因である。親のエゴ。親と子ども人間として1対1の付き合いが必要。

- ・大人が「子どもの権利・義務」をどうこう言うよりも、子どもに「いい事・悪い事」をはっきり教えて子どもにとってのいい環境を作っていくべきである。

午前の部の最後には、午後でぜひとも考えていきたい事・昼休みに考えてもらいたい事を募った。午前中は全体的に抽象的な話が多かった為、もっと具体的な話をしたいという要望が出た。テーマ【1】子どもの権利条約に則った活動をどうしていくのか。(大人の自己満足に終わらないためには?)【2】ファシリテーターの役割はどのようなものか。(子どもと大人の協働はどうしたらいいのか?)

【午後の部】

■参加人数

参加人数： 22名
参加者： 15名
スタッフ： 7名

■流れ

午前からの引き続きの参加者と新たな参加者で再び簡単に自己紹介（名前・出身・所属・気になること・知りたいこと等）。午前中に出たキーワードを基に各々テーマを出し合い語り合い開始。具体的に出てきた話題は、【1】実際の活動について具体的に知りたい。実践で活用できる話をしたい。現在関わっている青年の子どもへの支援方法を知りたい、【2】活動をするに当たって、対象の子どもの集め方、【3】子どもの意見表明権について、【4】子どもへの情報伝達について、【5】子どもの権利を発信していく場について（大人の課題として）等が挙げられた。

■午後の「語り合い」で出た意見

まず取り上げられたのは「ファシリテート」の話題。

・広島のある子ども劇場では「10代の育児養成講座」を開始。当初の目的は、自分が子どもを産んで初めて子どもに接する人が多くなった現在、もっと若いうちから子育てに地域で参加して10代の子ども達に自信をつけてもらおうというものであった。実際、子どもを預ける側の親御さんからの評価もよく、講座依頼も増えた。依頼の増加によって子どもの活躍場所が増えるのかと思っていたら、蓋を開けてみれば子どもが安く使われるようになっていた。周りの大人がみんな子どもの権利を考えながら活動はしていないので、もっと子どもの権利を考えながら啓発活動を進めていかなければならないのが現状である。

・親が理解を示してくれないとき、保護者の理解を深めるファシリテートも大切である。

・その一つの案として、単発的ではあるが、「ロールプレイ」の手法も有効的である。PTAを対象に寸劇を途中まで演じ、その後のストーリーはグループごとに話し合っ作ってもらい、実際に自分達で演じてもらう。これは、大人でありながらも、子どもの役もするので子どもの立場にたって考えるきっかけとなる。

・我々の活動全てを親に分かってもらおうとしなくてもいいのではないかな？

・個々の活動だけで全てどうにかしようとするに限界があるので、補填と言う意味で各団体で助け合っていくためにネットワークを組む事が必要なのではないかな？

・確かに困ったときに（助けがほしいときに）何処に行けば情報を取れるのか、情報を得られる施設は少ない（ない?!）

・ネットワークを作るのは大切。その前にお互い（の活動内容）を知り合うことから始めなければならない。そのためには、お互いの考えを知り合える場が必要。（仲良しになるという意味ではない。）

・実際に子どもの活動を支援していく中で、どのように子ども達と接していけばいいのかがいまいち分らない。いつも、自分が楽しかった・子どもも楽しかった、で終わっている。これでいいのかどうか。

・楽しければいいと思う。それが一番大事。大人は青少年に社会と関わっていくためのチャンスを与える役目。つまり、本当に困った時の相談者であり、最後の最後まで手を出してはいけないと思う。子どもたちは体験・経験を重ねていく中で社会とのつながりを感じていくのである。

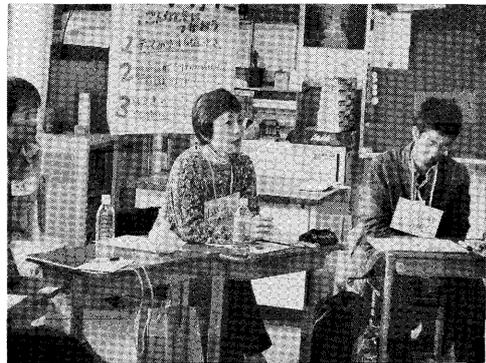
・楽しさも大切だが、青年達は何らかの意図を持って活動をしていくべき。そのなかで、どうやって子どもたちも楽しむ事ができるのか、子ども達の自主性を引き出す事ができるのかを考えることが大切。この様に進めていく力を高めること＝ファシリテートなのではないか？ どうやったらこの様に進めていくことができるのかを考える必要がある。楽しさ・意図・理念のバランス。

・意図と流れを持って、自分達も子ども達も楽しむ事が大切。楽しみつつまわりを見て。

・ねらいと過程を重視するなら最低限してはいけないことだけを子ども達に教える。(高校生)

・現在、中高生を対象にした活動をしているが、対象となる中高生が集まらない。どうやって集めているの？

・子ども、特に中高生は本当に活動が楽しくなければ集まらない。ほとんどの団体は親子・小学生を対象にした活動を続けてきて、中高生を育て上げてきた。いきなり中高生を対象とした活動は少し難しいかな。



・現在は市の広報やビラ、社協やボランティア協会の協力を得るほか、小学校等に働きかけている。

・一番有効なのは友達同士のクチコミ。

・開催場所もよく考えなければならない。遠すぎれば人は集まりにくい。個々の活動だけで全てどうにかしようとするとう限界があるので、補填と言う意味で各団体が、助け合っていくためにネットワークを組む事が必要なのではないか？

この分科会では、限られた時間の中で、自らの体験や活動内容について意見を言う参加者もいれば、黙って青年の今の考えを聞く大人もいるなど、1つの固定した形にとらわれないやり方で行った。結論らしい結論が出たわけではないが、同じような活動を違う地域や団体がそれぞれの視点から展開していることを各々が知ることができるきっかけとなった。分科会の名称のごとく、「熱く」語れた者、残念ながら「不完全燃焼」で「熱く」なれなかった者もいるかもしれないが、担当した協会の青年ボランティアスタッフたちも色々な意見や活動に刺激を受けることができた。今後の自分たちの活動の糧とし、新たなステップとしていきたい。参加して下さった方々、どうもありがとうございました。

人権の視点から思春期の生と性を考える

～思春期の子どもと子どもに関わる大人のワークショップとパネルディスカッション～

みのおCAP

<午前の部> CAP 中学生暴力防止プログラム大人ワークショップ

～思春期の子どもに伝えたい、生きる力と自分を守る力～

対象：大人

講師：西野 緑・松本 史恵・中瀬 弘雅

<午後の部> パネルディスカッション ～本音で語り合おう 子ども・教師・地域の大人～

対象：大人と思春期の子ども

コーディネーター：西野 緑(みのおCAP代表)

パネラー：竹内 未希代(東海大学第三高等学校非常勤講師)

伊藤 つばさ(高校3年生)

■分科会のねらい

川西市は、市の予算ですべての小学校においてCAPプログラムを実施しています。しかし、中学校は2校の大人ワークショップを実施したのみで、子どもたちには届けられていません。

そこで、午前中はCAPで提供している、中学生暴力防止プログラム大人ワークショップを体験してもらい、今後の広がり期待しました。また、「デートレイプ」のロールプレイを模擬体験してもらい、「人権の視点から思春期の生と性を考える」きっかけにし、午後につなげました。

午後からは、現役高校生からビミョウでフクザツな十代の生と性、高校教師から自尊感情を育てる性教育の取り組みについて話題提供してもらい、参加者である保護者、教師、地域の人たちが思春期の子どもたちの生と性について率直に語り合い、はじめの一歩にしたいと思って企画しました。



■企画者側のふりかえり

やなぎホールという大きな会場だったので、スタッフ一同、チラシ作り、声かけなどに大変苦労しました。しかし、そのかいもあって、午前・午後ともに全国から多くの学生、保護者、教師、看護師、助産師、地域の人、CAPスペシャリストたちが参加し、活発に意見交換ができました。生と性を子

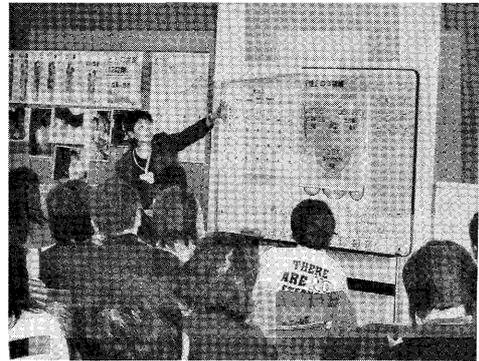
もの問題としてではなく、大人ひとりひとりが自分の問題として考えるきっかけになったと思います。

■参加者の感想

・「デートレイプ」のロールプレイでは、女性の視点からの話を聞いて、自分が男性側の言い訳をしていることに気付かされ、自分も男性社会の中にどっぷりつかっていることを考えさせられた。

・三年前まで高校生だった自分でも驚くような話がたくさんありました。つばささんからのメッセージで、「一人の子どもを見て、最近の子どもはこうなんだとは決して思わないでほしい」ということを聞いて、大人と子どものいい関係を築いていくためにこのメッセージは大人のすべての人が子どもと接するとき、常に意識してほしいことだと思いました。

・性のことは、学校でもタブーのような感じがしていましたが、本当に大事な事はしっかり学ばなければいけないと思いました。性について、もっとオープンに学べる環境、竹内さんのような先生がたくさん増えたらいいなあと思いました。



・このフォーラムに参加して、私は自分を見つめ直す事といろいろな事に対して深く考え自分の意見を発言する事の大切さを学びました。フォーラムに参加してよかったです。

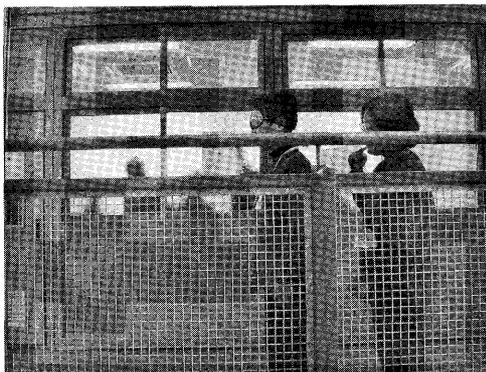
・竹内さんの取り組みは一年を通じていろいろなことを考えていく内容で、一年に一度ぐらいしか授業で扱っていない私にとっては驚くことばかりでした。話を聞くにつれ、その中途半端な性教育の取り組みが子どもたちにしっかりと伝わらず、子どもたちを生と性で悩ませていることにも気付かされました。

(参加者人数：85名)

非暴力アクション・ワークショップ

NPO法人 女性と子どものエンパワメント関西

あらゆる場所、あらゆる形での暴力があふれている今、NPO法人 女性と子どものエンパワメント関西は、全ての人々が問題解決を暴力に頼らない「非暴力」を学ぶ必要性を強く感じ、暴力の被害者にも加害者にもならないための非暴力トレーニングをめざして、日本初の試み《非暴力アクション・ワークショップ》のプログラム作成に取り組んでいます。



《非暴力アクション・ワークショップ》は、頭だけで理解するのではなく、感情を心で感じ、からだを使って表現することの効果を経験しながら、その人がもともと持っている生まれもった力を引き出すエンパワメントの考え方にもとづいており、演劇、歌、ロールプレイ、ゲーム、アート・ワークなどのさまざまな手法を使います。

今回は、その中から、ゲームやグループでの話し合い中心のプログラムを作り、からだの動きの可能性や声の力に気づき、五感（みる・きく・あじわう・ふれる・においを感じる）の変化について考えることと、グループのメンバーがお互いに刺激しあってさまざまなアイデアに気づき、それぞれ自分なりの方法で、感情にも向き合えること、たとえ怒りを感じても暴力を使わずに“非暴力”で問題を解決する方法があることを学んでいくことを目的にしました。

■参加者の反応

・非暴力とか、アクションとかというのがよく分からなかったのですが、難しそう思ったが、やってみたら面白かった。

・体を動かすことで気付いたことがあり、新鮮だった。

ゲームで他の人と組んだ時、自分が相手を信頼するようになるにつれて、自分のからだの動きが変わるのが興味深かった。

・他の人の発言がキッカケになって、自分の感覚が敏感になるのを感じた。

・からだを動かすと、表情も和らぎ、こころも軽くなって、話し合いの中で交わされる言葉がピンピン響いてきた。からだを動かすって楽しい!と思った。



午前中に参加して、気付いたことがたくさんあった

とのことで、午後も二度目の参加をしてくれた方たちや、午前中の評判を聞いて午後のワークに参加してくれた方たちもいました。

今回のフォーラムでの参加者の反応から、非暴力アクション・ワークショップのニーズの高さを痛感しました。

女性と子どものエンパワメント関西では、学校や地域社会などで、子どもにもおとなにも《非暴力アクション・ワークショップ》を提供し、非暴力社会の実現に寄与したいと考えています。



(参加者人数：午前子ども+おとな 11人 午後おとな 16人)

